

Book Review 36-33 逃亡 #迂回

『#迂回』（イヴ・ラヴェ著）を読んでみた。著者は1953年フランス・ブザンソン生まれ。作家・劇作家。2004年に自身の父の死をテーマにした作品でマルセル・エイメ賞を受賞した。本書は、2022年度のゴンクール賞、ルノードー賞、フェミナ賞に次々とノミネートされた。ジョルジュ・シムノンの後継者と言われているそうだ。

妻と関係修復のためにシチリア島タオルミーナを訪れたMは、レンタカーでホテルに向かう途中で、妻に海を見せようとしたが無駄骨に終わり、そのうえ道を間違えホテルに辿り着けずにいた。土砂降りのなか未舗装の道を進み続け、宿に向かう途中「何か」に衝突する。「何が起きたか、絶対に確かめたくない！」Mは妻を説き伏せ、車を走らせ続ける……事実から目を背け、最悪の選択を重ねる。

運転していたレンタカーが何と衝突したのが不明のまま、淡々と語られる男の異常な行動がM夫婦の行く末が陰気で、不穏な雰囲気醸し出す。言い訳にもならない屁理屈で旅行を続けて、妻との対話も避け、誤った選択を重ねるうちに泥沼にはまり込んでゆく。

最後に警察に追われて逃げ回るのだが、果たして逃げきれるのか？逃げ切れたとしても、心落ち着く人生が待っているのだろうか。

（交通事故で）警察に追われる作品は

『天使の耳』（東野圭吾著）：交通事故をテーマにした連作短編集。

『八日目の蟬』（角田光代著）：交通事故ではなく「誘拐」が主題であるが、逃げ続ける主人公の心理描写が秀逸だそうだ。

『流星ワゴン』（重松清著）：主人公が交通事故で亡くなった父子とともに過去を旅する。事故と人生の岐路が交錯する物語。

『#熟柿』（佐藤正午著）先日、Book Review 36-31で紹介した。ひき逃げ犯の烙印を押されて生きる人生。